
縁風のシェータ

日野咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑風のシーラ

【Zコード】

Z0521Y

【作者名】

日野咲夜

【あらすじ】

少女神は、ある時、少し変わり者の皇子・アトルと出会う。アトルは少女に?シェーラ?という名前を与え、二人は心を通わせていく。そんな時、帝国に彗星が現れた。それは闇を追い払う神ウイツィロポチトリが弱っているからだと騒がれ、高貴な生贊が捧げられることになった。そして、その生贊として第2皇子であるアトルが選ばれてしまった!

古代のアステカ帝国を舞台に、一人の神と少年の物語が、始まる。

(毎週日曜更新)

登場人物（随時更新）

（登場人物）

ショーラ（ショチトナティウ）

元は名無しの下級神。『ショチトナティウ』というのはアトルに貢つた名前。植物の中の、主に草花を司る。名前の由来は『太陽の花』。

蜂蜜色の肌と白緑色の髪。瞳は、菜種油色。明るい性格の少女神。

アトル

アステカ皇帝モクテスマ2世の第2皇子。しかし、モクテスマ2世の側室の息子なので、周りにあまり良く思われていない。

飴色の肌と濡羽色の髪。瞳も髪の色と同じく。誠実で心優しい少年。割と博学。

メトスイー

アトルの友人。自称・女流詩人だが、実は男盗賊。でも女装が得意。黒髪黒目の褐色の肌で、一般的なアステカ人。

面白いもの好きで明朗な性格だが、実際は……？

モクテスマ2世（モテウクソマ・ショコヨトル）

アトルの父親で、アステカの第9代皇帝。

（登場する上級神の方々）

テスカトリポカ（ヤヤウキ・テスカトリポカ）

『煙を吐く鏡』という名を持つ、黒い夜風の神。生死、運命、正義を司り、泥棒や呪術師の守護神。また、月や夜空、破壊を齎す邪もたら神。

悪な闇の怪物に力を貸す存在。ケツアルコアトルやウイツィロポチトリとはライバル。

ケツアルコアトル

『羽の生えた蛇』。風と生命と豊穣を司り、太陽神、大気・天空の神ともいわれている。一度テスカトリポ力によつてアステカから追放されたが、「『一の葦の年』に帰還する」と言い残している。人ひ身御供とみごくうを嫌つた神。

ウイツィロポチトリ（オミテクトリ）

『南の蜂鳥』。太陽、戦争、狩猟の神で、太陽に害する闇の神々を追い払う戦士、または軍神。

プロローグ

最初に、?オメテクトリ?と?オメシワトル?と言づ、一対の創造神が居た。

彼らは、宇宙、神々、そして地球を創造し、四人の息子を生んだ。

長男の赤い神、トラトラウキ・テスカトリポ力。

次男の黒い神、ヤヤウキ・テスカトリポ力。

三男の白い神、ケツアルコアトル。

四男の青い神、オミテクトリ。

彼らが生まれて六百年後 。

三男のケツアルコアトルと、四男のオミテクトリにより、天地創造が行われた。

彼らは協力して、火や、天や、地、海、地下界などを創り、そして一組の男女を創った。

男は?ウシユムコ?、女は?シパクトナル?と名付けられ、二人の間から人間マセワルが生まれた。

時は経ち、神々の住まう大地に、人間達が?テノチティトラン?という都市を築いた。

彼らは大地を耕し、町を増やし、遂に?アステカ帝国“という国を建国した。

その国の民達は、古くから神々の存在を感じ、それを信じ、代々

祀り上げてきた。

その中に、四人の兄弟神が居た。その内の二人に、ケツアルコアトルと、人々に？テスカトリポカ？と呼ばれるヤヤウキが在った。二人は正反対だった。生贊を求めるテスカトリポカと、平和を好むケツアルコアトル。それ故に、しばしば兄弟喧嘩の領域を超えた問題を起こしていた。

そして、ある時遂にケツアルコアトルが、テスカトリポカによつてアステカの地から追い出された。

勝敗は、決まったように思えただろう。
だが、彼は言ったのだ。

『私はアステカから永久に消える訳ではない。？一の葦の年？に必ず帰還しよう』
(『アステカ神話』より)

第1章 草花の神様

温かな日の光が降り注ぐ丘にて、少女は「」と寝そべっていた。

「はーあ……退屈」

血色の良い蜂蜜色の肌は、太陽の光を受けて、仄かに赤らんでいた。春ほど心地の良い時期はない。けれど、春ほど眠くなる季節もない。

光をきらきらと反射する白緑色の長い髪を揺らして、少女は一つ寝返りをうつ。その際に頭に載っていた小さな桃色の花が、ポロリと落ちた。その様子はとても愛らしくて、まるで花の妖精か、女神のようだった。

そう、彼女は神だ。けれども、あまり位の高くない下級神で、司っているのも植物の中の小さな草花だけ。今回も、上司の神に言われて、大地の草花の様子を観察しに来たのだった。

今はその仕事もすっかり終わってしまって、退屈な時間を持て余しているところだ。

「でも……気持ちいいなあ。あー、あつたかい……」

「そうだね」

(ー)

突然掛けられてきた声に、少女はハッとして起き上がる。すると、葉が踏み拉かれた草原の上にぱらぱら落ちた。余程草塗れになつていたのだろう。

「誰よ……あなた」

訝しげな目で、少女は声の主を見つめた。

このアステカでは一般的な、黒い髪黒い目、そして飴色の肌を持つ少年だった。だけど、どことなく品があつて、普通の育ちではないことが見て取れた。そもそも、着ている服が高貴な身分の者であると語っている。

「僕はアトル。アステカの農民。君は？」

に一つと微笑んで手を差し伸べる彼に、少女はふことわっぽを向いた。

「あなたが嘘をついてるから教えない！」

アトルは驚く様子もなく、相手を窺うように耳元でそつと囁いた。

「……嘘つて？」

「あなたが身分を偽つてることー！」

近づいてきた彼を押し退けて、彼女は彼を睨みつける。ただの農民が、どうしてそんなに綺麗な服を着ていられるというのだらう。

「じゃあ、君は僕がどんな身分だと思つ?」

アトルは面白そうに、少女に問いかけてきた。睨まれていることを、あまり気にしていないようだ。

そうねえ、と少女は顎に手をやる。

「…きっと神官か、または皇族！と思つけど、皇族がこんな所でふらふらしてゐるも可笑しいから……たぶん神官の息子辺りでしょ？」

口角をにやりと上げて、自信たっぷりに答える。自分で言つのも何だが、これでも洞察力は高い方だと思つていい。

「…惜しい、外れ。僕にはね、国の最高位に立つ父上がりいるんだよ

まじめつこじこ言い方をしてゐるが、少女はピソときた。

あつ。

「第1皇子！？」

目を見開いて驚愕する少女に、アトルはくすくすと楽しそうに笑つた。

「またまた外れ……。僕は2番目。アステカの第2皇子なんだよ
えええええ
ー！」

「どっちにしても皇子様じゃない！こんな所で何してるのよー。
動転して早口で喋る少女に、アトルはしつゝと言つて彼女の唇に人差し指を当てた。

「「「めん、あんまり騒がないでね……ばれると大変だから

「大変」と言つていながらもくすりと笑つてゐるから、全然説得力がない。でも、少女もそれがどんなことかは理解しているので、言われる通りに静かにした。

「さて、と……じゃあ、君の名は？」

名前を聞かれて、少女は戸惑つた。どうすれば良いのかわからない。だつて……自分には名前はないのだから。

上司にも名前で呼ばれる事ではなく、いつも？草花係？と呼ばれていた。

本当は自分にも名前が欲しかつたけれど、それは仕方がないことだと理解していた。数少ない上級神とは違つて、自分達下級神は星の数程沢山居る。その一人一人の名前なんて、とても覚えられはない。だから名前は与えられず、担当するものの名で呼ばれる。枯葉なら？枯葉係？、草花なら？草花係？と……。

「どうしたの？」

アトルが心配そうに顔を覗き込んでいた。その時、いつの間にか自分が俯いていることに気づいた。

こういう時は、人間が羨ましい。ちゃんと名前があつて、その存在を知つていて貰えるんだから。

考えすぎて涙が出てきそうになつてきただので、前向きに考えることにした。うん、？草花係？という名前だということにしておけば良い。……少し変だけど。

「く、草花係……」

顔を上げて、精一杯の苦笑を浮かべて言つた。恥ずかしさで、元々赤かつた頬は真っ赤になつていた。

「ふうん……そつか……だから君は、草花みたいに温かいんだね」

アトルは、声を立てて笑つたりはせず、優しく微笑んでくれた。皇子様だから、そんなことは基本なのかもしれないけれど、なんだか、ほっとした。

アトルは、少女がやつていたよつと源つぱにじりひと寝転んだ。その様子は皇子といふよりは、彼が言つような農民みたいで、何だか笑えてしまった。そして、彼の隣に少女も腰を下ろす。

「春は気持ちいいなあ……」

彼は、瞼を閉じて呟いた。

それ以上、彼は何も言おうとしなかった。

しばらぐ経つて、彼はふと目を覚まし、飛び起きた。

「……うん、決まった！」

「？ 何が？」

さつさと立ち上がる彼に驚きながら、少女も起き上がる。やつぱり草がぱりぱりと落ちた。

「君の名前！」「

アトルは楽しそうに言った。髪には葉っぱがまだ付いていて、無邪気な子供のようだった。

「あたしの……名前？」

そうだよ、とアトルは彼らしい爽やかな笑みを見せた。

「君は温かくて、陽の光みたいだから……？」シヨチトナティウ？

！

「シヨチトナティウ……？ 太陽の花？」

アトルは、寝てたんじゃなくて、あたしの名前を考え歩いてくれてたの？

唚然とするシヨチトナティウに、アトルは笑つた。

「そう、シヨチトナティウ……？ シヨーダ？！」

「……シヨーダ……」

少女はその名前を呟き、俯いた。そして小さな小さな声で、言つ

た。

「…………う……」

アトルはあえて聞き返さず、じつと彼女を見つめた。

「ありがとう……名前を、くれて」

小さなショーラの頭に、アトルはぽんぽんと手を置いた。

「どういたしまして」

彼の手は、人間でいう母親のようで、とても心地良かつた。

(そうだ……)

アトルは、あたしの疑問に答えてくれた。名前もくれた。だから……これは伝えなくちゃ……。

あることを思い出して、ショーラは顔を上げた。涙は出でていない。でも、瞳は潤んでいた。

「あのね……あたし、アステカ人じゃないの」

その言葉の意味が彼に伝わるようになはつきりと言い切った。

「うん、分かってるよ」

アトルは驚いたりはせず、ただ微笑んだ。

見れば分かる。彼女がアステカ人ではないことは。自分達より白い肌、色素の薄い髪、金のような菜種油色の目……。異形だからこそ、興味を持った。話しかけたいと思つた。……彼女が逃げてしまわなければ、だけど。

ショーラは、言い難そうに言葉を続ける。

「それでね……あたしは、その……あなた達の言つ、神様なの……」

「えつ……」

今度ばかりは、さすがの彼も驚きを隠せないようだつた。それも

そうだろう。相手に「自分は神だ」と告げられたら……。

「そうか、なんだ！　君は神様なんだね！」

けれど、彼の顔はすぐ興味津々な子供のそれに変わつた。

「そうかあ……神様があ。君は凄い人だつたんだね。あ、人ではな
いか……」

楽しそうに話すアトルに、ショータは食いついた。

「違うよ！ あたしは凄くなんかない！ ただの、下級神だから

……」

ショータは苦しげに眉間に皺寄せた。名前を貰えなかつた悲しみ、苦しみが蘇つてくる。

でも、アトルはそれを不思議そうに淡々と言つのだ。

「……下級？ 人でも神でも、上下なんてないよ。……それに、僕達にとつて君達は本当に尊敬する存在なんだ。君だつて……何かを司つているんだろう？」

「一応、草花を……」

「操つたり？」

「それはまだしたことはないけれど……草花畠を一瞬で作つたりとか……」

「やつぱり凄いじゃないか！」

アトルは再度瞳を煌めかせた。

「僕等人間は弱い生き物だよ。だから、特別な能力を持つた者に憧れるんだ」

彼は、どこか遠くを見ていた。何かを探すような、求めるような……。

常に何かを求め続けるような彼は、好奇心の宝箱みたいだと思った。

「凄いのかなあ……」

ショータも、彼のようすに遠くを見つめた。太陽が暖かい日差しを投げ掛けていた。

「君は凄いし…それに、僕も凄い」

「！ 自分で自分のこと褒める？」

妙なことを言うアトルを、ショータはぎょっとして見つめた。

あれかな。人間達の言つ、自己満足？

「それってさ、自己満足じや……」

「あははっ、たまには自分も褒めないと……ね？」

言い掛けたシェータを遮つて、アトルは初めて声を立てて笑つた。

それが何だか嬉しくて、シェータも笑つた。

「凄いところって……例えばどんな？」

「君は草花の友達で……僕は君の友達！」

「友達？」

シェータがきょとんとすると、アトルは再び手を差し伸べた。

「ほら、まずは握手。今日から、僕は君の友人だよ」

「うん！」

少女は戸惑うことなく、彼の手を取つた。

この時から、シェータの中で、一つの歯車が廻り始めた

第2章 アステカの都

暖かな丘の上、二人の人影はじつと田の前の小鳥を見つめていた。

「……いくよ、セーのつ！」

ショーダは勢いよく繩を引き、籠を支える木片を倒す。運良くその下に居た小鳥が、籠の中に閉じ込められる。

ショーダと傍に隠れていたアトルは、嬉々としてその籠に走り寄つた。

「やつたあー！ 捕まえたよ、アトル！ なかなか上手いでしょ」初挑戦の罫で捕まえた小鳥を掴んで、ショーダはきやつきやと飛び跳ねる。その小さな子供のよつな仕草が、とても愛らしい。アトルも微笑む。

「でも、ショーダ。罪のない小鳥は逃がさなきゃいけないよ」

幼い子供にするように頭を撫でられ、そう諭されて、ショーダは渋々小鳥を放す。丸々とした小さな薄茶の小鳥は、暖かい春の晴天へ向かつて元気に羽ばたいていった。

ショーダはそれを清々しい表情で見送ると、今度は膨れつ面になつてアトルに抗議した。

「もおー…市場に持つて行つて誰かに買つて貰おうと思つてたのに……」

彼女は、数日前アトルに連れて行つてもらつた市場に行く口実が欲しかつたのだ。前回言つた時はあまり時間がなくて、まだ見切れてない所が沢山あつた。それを見に行きたくてうずうずしていたので、少し残念そうな顔をしている。

「生き物は自然に居る方がいいだろ？」「

アトルがいつもの人当たりの良い笑顔で笑うと、ショーダはそっぽを向いて顔を赤くした。

そんな風に笑つて注意されると、まるで自分が子供みたいじやない。

だが、ふとある案を思いついて、アトルに向き直る。

「でも……誰かが飼ってくれたら、小鳥は幸せじゃない！ 苦労せずに食べ物を貰えて……」

「本気でそう思つの？」

両手拳を握つて力説するショーダに、アトルは悲しそうな顔をした。まるで、その小鳥の？ 悲しみ？ が分かつているとでも言ひよう。

「シェータ、僕の身分は？」

アトルがそう問うと、シェータは飽き飽きして答えた。目を伏せて、ふう、と溜息をつく。

「だから、皇子様でしょ。もつ、これで何度も自己満足？」

「そう、皇子、だよね」

むくれていいるシェータの皮肉はあえて無視して、アトルは言葉を続けた。

「皇子とか皇帝つていう身分を皆は羨むけど、実際は凄く窮屈なものなんだ。どこに行くにしてもいつも護衛がついて来るしね。それこそ鳥籠の中の小鳥と同じで、自由なんかないんだ」
(…皇子様も、意外と大変なんだな)

「鳥籠の中の、鳥かあ……」

(…………ん？)

しみじみと空を飛んでいく数羽の鳥たちを見ていて、疑問が湧いた。

「ちよ、ちよっと待つてアトル。もしかして今も誰かが見張つているんじゃ……」

冷や汗を浮かべて尋ねるシェータを、アトルはあははっ、と笑い飛ばした。……この皇子様も、だんだん農民染みてきたことだ。

「それはないよ、シェータ。大丈夫、ちゃんと撒いてきたから

「ま、撒いて……？」

そんなことをして良いのだろうか。護衛が主を見失つたりしたら、首が飛ぶんじゃ……。

「それって本当に大丈夫なの？」

心配そうな、どこか困惑した顔でショーラは問う。対するアトル

は、心配ごとなんか全くないと言つたように、樂觀的に笑つている。

「大丈夫だつて。そんなの得意だし、護衛達は自分で理由を見つけるだろ？ いつもそうだつたしね」

アトルは何でもないことのように言つているが、ショーラにはそれが安易なことには思えなかつた。

「いつもつて……なんで？」

先程から質問攻めで、少しづつこいかなと思つたけれど、引っ込むのは性に合わない。

「そうだなあ、まず僕の生まれに問題があつたのかな」何とも言わず、アトルは思い出話のように語つてくれた。

『僕の父上は今の皇帝であるモテウクソマ・ショコトル陛下だけど、母上は、ちゃんとした奥さんじゃないんだ』

アトルは、遠くに霞む街を見て、懐かしむように言つた。

『えーと……それはつまり、愛人つてこと？』

ショーラが首を傾げていると、アトルは、まあそんなとこかな、とほやいた。

アトルの言つている意味をもう一度良く考え巡らしてから、再びかくんと首を傾げる。

彼女は天界の出身だ。天界では、一人の夫に子供が沢山居たり、女が沢山の夫を持つのもごく普通のことだつた。それが人間ではあまり良くないことらしい……嫉妬深い女達や、誠実だとかいう男達にとつて。

『皇帝にお世継ぎがいっぱい居るのは良いことなんじゃないの？』

『皇帝にとつてはね』

アトルは草臥れた様子で、ふう、と溜息をついた。聞かれたくないことだつたのだろうかと、ショーラは戸惑つていたが、彼は自分

から切り出した。

『まず、第1皇子は正妃の子供だね。で、僕は第2皇子。このま何もなければ兄上が帝位に就くのは分かるよね?』

シェータはこくりと頷く。

『だけど兄上は病弱で、あまり体の調子が良くないんだ。これは政に支障を来す虞がある。となると、何人かの者達は、健康で、その上利発とか言われている僕に次期皇帝へと即位して貰いたいと考えるようになる訳だ』

(……利発?……)

また自己満足かと、シェータは心中で苦笑した。

『そうなると周りは黙っちゃいない。正妃様はお優しい方であります騒がしいのは好まないけど……彼女や兄上の側近達が躍起になつてね……。ちょくちょく嫌がらせをしてきたんだ』

『え……』

ふわふわしていた気持ちが追い出され、重たい気が体の中に据え置かれた。

シェータは咄嗟に顔色を変え、アトルに掴み掛る。

『い、嫌がらせってどんな!/? 毒盛られたりはしなかつた!/? 蠍を投げ掛けられたりは……』

『シェ、シェータ……』

物凄い剣幕で訊いてくるシェータの肩をやんわりと抑えて、アトルはまた苦笑いした。

『嫌がらせて言つても……そんな大したことじゃなによ。派手にやると彼らの身が危ないからね』

『そり……?』

『うん、まあ……でも、僕のお目付け役は彼らの手の者だから、正直言つて僕の警護なんてどうでも良いんだよね。だからこいつやって好き勝手出来るってこと』

『……………』

アトルは笑つて言つけれど、本当はもつと辛いことだつてあ

つたはずだ。それを……今みたいに誰にも言わずに過ごして来たのだろうか。

『まあ、そのお陰で良い友人が一人も出来たけどね』

『…………一人?』

何か引っかかった。

(一人は……あたしだよね。あれ? ジャあもう一人は……)
頭を抱えて、むーんと考え込んでしまっているシェーラに、アトルは思いがけないことを言つた。

『会わせてあげようか? 僕の最初の友人に』

アステカ帝国の首都、テノチティトラン。

賑やかに溢れかえる人々と、文明豊かな街。

そこにはいくつもの商店が並んでいて、トウモロコシや芋の匂いが香ばしかつた。

さらに食べ物だけでなく、綺麗な声、羽の鳥や、美しい衣装なども目に付いた。とにかく彩色豊かな街だ。

市場にはすでに来たことがあつたので、大体の勝手は分かる。迷子にはならない。だから、本当は燥いはしゃであちこち見て回りたかったけど、そう出来ない理由があつたので、シェータはアトルに手を引かれるまま、静々と歩いていた。

理由、というのはアステカの人間なら誰もが分かるだろう。そう、彼女の風貌だ。

アステカ人の全体的に黒っぽい風貌の中で、彼女の容姿は目立ち過ぎる。その上異国人などが国内に居たら、すぐさま皇帝の目が付くだろう。そうなつたらアトルに迷惑が掛かつてしまつ。それは避けたかった。

とりあえず人目に付かないように肌には泥を塗つて汚し、さらに頭からすつぽりと布を被つた。そしてアトルも皇子という身分上シ

エーダと同じように布を被つて人目を避けた。これなら誰も気付かないだろ? ということで、都を訪れることになつていいのだ。

最初に市場に来た時は、逆に怪しい人と思われて警戒されてしまふのではないかと思ったが、同じような格好の人は割と多く居て、ほつと一安心したものだった。後は大人しくして居れば良いだけのことだ。

とは言え、やはり興奮してしまうのが彼女の性なのだが。

「わ……アトル見て見て! あれ美味しそう……あ! あつちには綺麗な小鳥が……」

目をきらきらさせて、シェーダは小動物のようにあちこち見て回つた。その後をアトルが慌てて追いかける。

「シェーダ、まずは僕の友人ととの待合場所に行かないと……」

「あ、あれは何?」

シェーダは一つの集いを指差して訊いた。そこには貴族の者やまた貧相な者など、様々な人々が集まっていた。

好奇心に逆らえず、シェーダはそこへ駆け寄る。

「ちょ、シェーダ!」

アトルは彼女を止めようと腕を伸ばすが、彼女は捉まらず、さつさと先に行つてしまつた。

人混みの隙間から、シェーダはその集いの様子を覗く。

そこには沢山の裸の人々が居て、何だか交渉をしているようだつた。

追いついたアトルがシェーダに言った。

「シェーダ、あれは奴隸売買だよ。人間達が同じ人間の取引を行つてゐるんだ」

「人間の、取引?」

妙なものでも見るような目で、シェーダはアトルを見つめた。

人間が、人間を売る? 彼らは、そんな愚かなことをしているというの?

シェーダには、にわかには信じられなかつた。だつてどう考えて

も可笑しい。同じ種の仲間を、差別して物のように扱うなんて。

「人間っていうのは、知能がある代わり、醜い生き物だからね。仲間同士で争い、競い合つ」

「あなたも人間でしょ？」

冷めた目で奴隸売買の様子を見つめるアトルに、シェータは詰め寄つた。眉間に皺を寄せ、いかにも理解できないと言つた表情をしている。

アトルは、己の胸をぎゅっと握り締めて、やり切れない表情で言った。

「……僕は、自分が人間であることが悲しい。もっと自由で在りたかったのに……人間の世界に居たら、それもままならない」

「……アトル……」

初めて、彼の心の悲しさを知った気がした。

困惑するシェータに、アトルははつとしたり。そして何のためにここに来たのかを思い出す。

「あ、ごめんね変なことを言つて。これは言わば僕の理想。深く考えないでほしい」

理想。

彼はそれは自分の理想だと言つたけれど、本当は現実で在りたかったのだろう。それを思うと、無性に苦しくなつた。

それは自分でも良く分からぬ感情で、自分は彼に同情しているのか、それとも人間が腹立たしいのかも、分からなかつた。

「シェータ、ここは離れよう。奴隸市場は性質たちの悪い破落戸こうりょくが集まっていることもあるからね」

「分かつた」

市では、ちょうど若い女の買い取り手が決まつたところだつた。彼女はまだ幼く若い少女のようで、その顔に浮かぶ絶望の色が、見るに堪えなかつた。

(……どうして)

どうして神である私達はこんなことを見過こしゆくしているのだろう。

上級の神ならば、止める」とも出来るかも知れないのに……どうしてなんだろう。

「お嬢さん」

(一)

低く重い声と共に、不意に背後から肩を掴まれてびくつとした。咄嗟に声の主を確認しようと思ったのだが、体が硬直して動かなかつた。

(大きな手……アトルの言っていた、破落戸?)

「あなたは、何ですか?」

初めての体験に緊張しながらショータは問う。

蠢く氣配がし、ショータはゆっくりと振り向かされる。顔に冷や汗が伝う。

「ふふ……冗談ですわ。ショータさん」

…と、いきなり優しい声に変わって、ショータは今度は驚きで固まつた。

現れたのは、艶やかな黒髪を艶やかに垂らす女性?……のようだつた。なかなか美麗で、地味な衣装を上手に着こなしている。そしてアトル以上の妖艶な微笑みを見せつけられ、ショータは呆然とする。傍には呆れ顔で苦笑するアトルが立つていた。

アトルが彼を示して言つ。

「はは……紹介するよ、ショータ。これが僕の友人で、盗賊のメトスイー! 性別は…男!」

「まあ嫌だ、男盗賊なんて……せめて淑やかな女流詩人とでも言ってください」

確かに……良く聞いてみれば、ちょっと無理のある男性の裏声だ。それでもあくまで女だと主張したいのかメトスイーはしおしあと体を折り曲げてアトルに目配せする。またもアトルは苦笑いした。

はい? 盗賊さん?

皇子様の意外な友人に、ショータは啞然としたまま、立ち尽くしていた。

第3章 友と王城

「えええええ ! 友達つて、とうぞ……」

「シェーダ！」

ようやく事態を理解し、思わず叫び声を上げてしまいそうになつたシェーダの口を、アトルが素早く抑える。幸い周りも騒がしかつたおかげか、特に目立ちはしなかつたようだ。

アトルは彼女に小さく耳打ちする。

「……こんな所で？ 盗賊？ なんて言葉を大声で言つたら、何が起ころるか分からぬよ」

「う、ごめん……つい……」

シェーダは申し訳なさそうにし�ょげていたが、驚くのも無理はないだろう。彼女の中では、既に皇族の友達イコール貴族というのが出来上がつていたのだから。

それがまさか悪行を熟す盗賊とは、思いもしなかつた。

「まあ、とりあえずわたくし私の家でお茶でもしましよう

未だに驚いているシェーダに、メツスキーは満足そうに笑んだ。

これが盗賊かと思うと……頭が痛くなつた。

女神と皇子と盗賊といつ奇妙な組み合わせの三人は、都からいくらか離れた所にある森の中へとやつて來た。メツスキーの家は、そこにあるといつ。

盗賊の住み処がある場所の割に、森の中は清々しくて、気持ちが良かつた。木立から小鳥がピイピイと^{さえず}囁くのが聞こえる。

風も爽やかで気持ちが良い。被つている布を剥いで、髪を風に触れさせたいくらいだ。

しばらく歩くと、木造の簡素な小屋が見えてきた。そこはまさに

?あばら屋?と書つのが相応しいくらい古びた小屋だつた。メツスイーはその小屋の前までスタスターと近寄つていくと、「どうぞ」と言いながら扉を開ける。促されるままに、二人は中へと入つていく。

(うわ……)

メツスイーの?家?とも言えない家は、ほとんど何もなかつた……盗んできた宝の山以外は。

狭くて小さな小屋の中で、どうせりと積まれた首飾りやら金貨やらがきらきらと眩しい。メツスイーのような変わつた盗賊のことだから、もつと小綺麗にしてあつて、上品な女性の部屋のようになつてゐるのではないかと思つていたが、彼女……いや彼もれつとした盗賊だつたらしい。

「はい。ここに座つてください」

金銀財宝の中から、メツスイーはいかにも貴族が使つていそうな上品な椅子とテーブルを引つ張り出し、まるで茶店のように綺麗に並べた。躊躇しながらも、二人は座つた。メツスイーは満足そうにして次は可愛らしいカップを三つ取り出し、その中に飲み物を注ぐ。そしてようやくメツスイーも席に着く。

「さて、アトルから聞いていたけれど……本当に変わつた色の髪ですねえ」

体に塗つた泥を白布で拭い、頭に被つていた布を取り払つたシェータを、メツスイーはまじまじと見る。シェータは自分の髪をいじつて、少し不安げな顔をする。あんまり珍しがられるのに慣れていなかつたからだ。

そのことに気づいたメツスイーが、掌をひらひらと振つて笑つた。

「あら、違いますわよ。あなたの髪の色が變つていふことではなくて、綺麗な白色だつて言つてるのですわ。少し緑色も帶びていて……気にすることはないですわ」

人柄の良さそうな彼の笑顔に、シェータはほつと胸を撫で下ろした。

髪の色のこともあるのだが、実は「盗賊は悪い者」という意識が

まだ残つていて、正直心配だったのだ。相手が危ない人だつたらどうしようかと。

だが、面白げに話す彼を見ていると、そんな心配は不要だと安心出来た。そもそも、彼は普通の盗賊とは違う気がする。女装しているし。

気が楽になつたところで、シェータはずつと気になつていたことを彼に訊いてみた。

「あの……どうやつてアトルと友達になつたんですか？」

彼は「嫌ですわ。敬語なんて使わないで」と苦笑してから、視線を上に向けて、思い出すように答えた。

「そうですねえ……この皇子様が、あまりにも皇子様っぽくなかつたからかもせんね」

アトルの方を向いてふふっと笑うメツスイーに、シェータは「こくこくと頷いた。二人の反応を見て、アトルが「そうでもないよ」と苦笑いする。

「私は金持ちだけを狙う盗賊なんですけど……なぜかその金持ちである皇子殿下に助けられてしまいました……」

「え？」

シェータは目を丸くしてアトルを見た。彼はお茶を飲んでいたところだつたのだが、メツスイーの言葉を聞くとぶつと吹き出した。

（ア、アトルは一体何をして……）

「もうつ、アトルつたら。相変わらず照れ屋なんですねえ。あの日だつて……」

「ああああああ、メツスイーそれは」

メツスイーがにやにやしながら言うと、アトルは真っ赤になつて立ち上がつた。こんな彼は初めて見た。どうやら照れ屋と言うのは本当らしい。

メツスイーはさらに続ける。

「あ、でシェータさん。この皇子様とお友達になつたきっかけだつたかしら。あれはねえ……」

「わあ　！！　ちょっとメツスイーってば！」

彼は熟した林檎のような真つ赤な顔で、頭を抱えて叫んだ。そんなに聞かれたくないものだろうか。

そこまで恥ずかしがられると逆に聞きたくなる。だんだんわくわくしてきた。

「ふふつ……教えて！　メツスイー」

「シェータまで！」

意氣投合して乗り気な一人に、アトルは心底困ったような顔をした。いつも物静かで穏やかな彼だったから、何だか可愛い。耳まで赤い。

「ええと、それは昨年のことだったのですけど……」

「……」

メツスイーが語り始めてしまつと、アトルは諦めた様子でまた椅子に座つた。恥ずかしいのか、唇を噛んでいた。

「私が神殿の篝火かがりびで温まつていた時のことだつたかしら。その時突然兵士達に追いかけられたのですわ。別に盗みはついでのつもりで来たのに……まったく一体何を誤解したのか……」

「…………神殿の不法侵入者は捕らえるのが決まりなんだよ、メツスイー。そもそもついでに盗みつて……」

アトルが口を挿むと、そんなものは知りませんわ、とメツスイーは言い訳をする。

「……で、面倒になつた私は上手い具合に彼らを撒いて、空き部屋に逃げ込んだのですけど……そこで」

「そこで？」

いつの間にか握られていたシェータの拳に、ぎゅっと力が籠る。

「第2皇子のアトルに会つたのですわ。もちろん相手は皇族なのだから、当然捕まると思ったのですわ。なのに彼つたら……ふふ

言い掛けて、メツスイーは口を隠して笑う。

「えつ、何？」

「」

ショーダが田をきらきらめさせて囁く。メツスイーは今度は大笑いして背中を反らせた。

「ふつ……あははははつ！……いえ、その時アトルは匿つてくれたんですけど、その時に……う、ふふ……『女性を助けるのは男子たる者の役目ですから』とか、本気で言つてくれまして……あははつ！」

女性？

「あははははは！……女性？つて……アトルつてばまんまと驕されちゃったのね」

「もうつ、そこまで笑うことないじゃないか……」

大笑いの一人に、アトルはも「も」と言つ。よつぼじ恥ずかしいのだろう、顔色は今にも沸騰しそうだ。

「まだまだあるのよ。アトルの面白話。えーっと……」

メツスイーが得意げに言つて、その「アトルの面白話」を指折り数え始めると、ふとアトルは簡素な窓から外を見て、慌てて立ち上がる。

「あつ、いけないもう帰らないと。じゃ、じゃあね……」「えつ？」

ショーダも外を確認する。まだ昼過ぎだ。暗くなつてもいいないし、そんなに急がなくてもいいはずだ。

「……そんなに恥ずかしかったの？」

そう訊くと、図星だつたらしく、顔を背けてそそぐひと帰り支度を始める。元々荷物なんてほとんどなかつたので、すぐに支度を終え、ぽかんと座る一人に言つた。

「じゃあ……」「ごめんね二人共。会議があるから……あ、メツスイー。ショーダのこと……その、お願いね」

それだけ言つと、彼はさつさと帰つていった。やつぱり帰り際の顔は赤かった。

後に残されたショーダがぽつりと呟く。

「……逃げたね」

「皇子様なのに、初心で可愛いのよ～」

シェータは、くねくねと色氣を振り撒くメツスイーを改めて見つめる。

彼の顔は、まさに女性そのもので、仕草も色っぽい。服装も女性らしい。まあ確かに、パツと見れば、アトルでなくとも女性だと勘違いするだろ？。声を聞くとなんとなく分かると思つただが。

「さて……」

お茶を飲み終えたメツスイーは、急に席を立ち、盗品の山の中をじっと探し始めた。何事かとシェータがその様子を見ていると、彼は動きやすそうな男物の服と短剣を取り出した。

「……何してるの？」

シェータがぎょとんとして訊くと、彼は何事か企んでいたそつにやにやした顔で振り向いた。思わずぞくつとする。

「ふふふ……王城に忍び込むのですわ」

メツスイーが楽しげに微笑むと、シェータはぎょつとした。

（ま、まさか金品を盗みに……！？）

「まあ、アトルの仕事ぶりを見に行くだけなのですけれど」

本当は力モ探しだけれどね、ということはあえて言わず、メツスイーは少女にウインクした。

彼女はほつとしたようで息を緩めたが、すぐに目をきらきらさせてメツスイーに掴みかかった。

「ねえメツスイー！ あたしも行きたい、王城！ 良いでしょ？」

「はあ

「！？」

意気揚々としていた盗賊は、目を見開いて、有り得ない！ といつた表情で飛び退いた。シェータが膨れつ面になつて言つ。

「いいじゃ行つても。駄目つて言つても付いて行くからね！」
頑として聞かないシェータに、メツスイーは頭を抱えて一つため息をつく。

そして、今までに見たことのない真剣な顔でシェータに言い聞かせる。

「あのねシェータさん。王城っていうのは警備の厳しい所で……」

一般人が簡単に行けるような所ではないのですよ。それに私の足手纏まといになるようでは困るのですよ

「いやー！ 絶対足手纏まといにならないから！ だから連れてつて！」

それでもなお自分の意志を曲げない少女に、メツスイーは大きなため息をついてから、諦めたように言った。

「全く……分かりましたわ。とりあえず、そこにある動きやすい服装に着替えてください。あ、それと……」

メツスイーは少年の服を渡した後、黒い染料を取り出した。

「それ…どうするの？」

なんとなく嫌な予感がしたショータは、冷や汗を浮かべつつメツスイーに問う。答えは案の定だった。

「あなたの髪を染めさせていただきますわ。でないと見つかった時の良い訳が面倒ですから」

そう言つなりメツスイーはさつやヒショータの髪を束ねようとしたが、彼女は自分の髪を抱えて後退する。

「どうしても？ 染めなきゃ駄目？」

「駄目、ですわ」

染めないと王城に連れて行つてもられないと悟つたショータは、渋々彼に髪を預けた。

時は、大分暗くなつた夕方頃。

西日が赤く輝く、黄昏の時間だ。ショータは夜中の方が忍び込みやすいのではと思ったが、メツスイーが言うにはこの時間が見張りの交代時刻で、侵入には一番の時間帯らしい。

静かで閑静な王城に、黒髪の男女は忍び込む。

そして、アトルが居るらしい一階部分へと向かう。

男の方がぶつくさと言つた。

「はあ、何でこんな女の子と一緒に潜入しなくちゃならんのだか
……一人ならあれもこれもし放題なのに……」

そう言つのは盗賊装束に身をやつしたメツスイーだ。昼間の彼か
らは予想できないほどの俊敏な動き、鋭い眼差しで、音も立てずさ
かさかと走る。口調も盗賊らしいものに変わっている。

「やつぱり悪いことしようとしてたのね……」

メツスイーの隣を走る金眼の少女が言つた。彼女はシェータだ。
元は白縁だった髪を黒く染め、肌にも泥を塗つてゐる。服も少年の
ものにして、いかにもアステカ人の少年のように見せてゐる。

「別に良いだろ、盗賊なんだから……つと、ここだな」

文句を言つていたメツスイーは、城のテラスに繋がる扉の前まで
来ると、慎重にほんの少しだけその扉を開けた。

(良し……誰も居ないな)

用心深く辺りを確認してから、メツスイーとシェータはテラスへ
出る。広い王城を駆け回つてゐる内に、外には紺碧がかかりかかつ
ていた。

だが、二人の目線はその一つ向いにある小さなテラスに向けら
れていた。そのせいで、気付かなかつた。空の異変に。

メツスイーは目先のテラスを指差して言つ。

「ほら、シェータあそこだ。あそこからアトルの居る部屋に繋が
つてる」

「本当!?

シェータは目を輝かせて、思い切り飛び跳ね、足音を立てずアト
ルのテラスに降り立つ。

「へー見事だねえ……」

(さて、じゃシェータはここに置いといて金目の物でも盗みに…
ん?)

ふつと北の空が視界に入った時、メツスイーが気付いた。

シェータはアトルの部屋の窓を覗き込む。高級で整つた部屋の中、
彼は一人で書物を読んでいた。

シェータは彼を呼ぼうとした。

「アト……」

その時だ。

「うわああああああああーー！」

城下からだらうか、突如悲鳴が響いた。

慌ててシェータもしゃがんで身を隠した。

あまりの出来事に、窓からアトルが顔を出す。

「何だ……つてシェータ！？ どうしてここに……」

シェータの存在に彼は驚いたようだったが、あるものを見つけるとその顔は一気に蒼白になり、一瞬固まつた。その目は北の空を見つめている。

「……嘘だろ……何だよ、あれ……」

同じように空を眺めるメツスイーも、震えた声を漏らした。シェ

ータも彼らに倣つて空に目を向ける。

……そこには尾を引く巨大な光があつた。

「彗星……？」

彗星が現れた。その意味を知らなかつたシェータは、ただただそう呴いた。これが波乱の幕開けになるとは知らずに。

第3章 友と王城（後書き）

次回は、遂に「第2部 波乱」（予定）へと進みます。ここから
神様も登場していきますので、お楽しみに～。

第4章 神への生贋

北の空に彗星が……。

どうしたというのだ。まさかテスカトリポ力様がお怒りに……。
何？ ウィツイロポチトリ様が守つてくださつているはずではな
いのか……。

きつとお力が弱つておられるのだ。

恐ろしきことや……。

ウイツイロポチトリ様には何としてでも闇を祓つて貰わねば……

……
この国はどうなつてしまふのか……。

悲鳴を聞きつけ、城下にはわらわらと人々が集まり出した。皆そ
れぞれに北の空を見上げ、あれこれと口論している。中には狂乱し
て暴れる者達まで居る。次々と明かりが灯され、闇の夜は昼間の如
き騒がしさに包まれた。

「……あつ、ショータ！」

アトルは我に戻ると、ショータのか細い一の腕を掴んだ。その手
は小刻みに震えていた。

「早くここから逃げてくれ！ じきにここは人だらけになる。誰
かに見つかる前に早く……これを持って逃げてくれ」

そう言つて、アトルは古びた小豆色あずきいろの布で巻かれた小包みを渡し、
立ち退くように促した。

「えつ……これつて……

「いいから早く！」

「……分かつたわ」

動搖するシェータを言い聞かせ、アトルは彼女の背中を押す。
(彗星つて……何が危ないのか、良く分からぬけれど)

「ほら、メツスイー！」

ショータは軽々とテラスを飛び越えると、相変わらず北の空を見つめるばかりメツスイーの服の端を引っ張って、半ば強引に王城から去ろうとする。意氣消沈していた盜賊も「あ、ああ……」と虚ろな返事をして、先へと急ぐ。

走り去る背に「アトル様、彗星が……！」と言つた女の慌てふためいた声が聞こえる。余程のことなのだ、この彗星は。

王城の部屋にも早々と明かりが点いていき、アトルの言うように早く逃げなければ見つかるところだつた。通り過ぎていく人影は皆バタバタと忙しそうにしていて、一人に気付くことはないかもしないが。

(…アトル…)

別れ際の彼の顔を思い出して、ショータは後ろを振り返る。

彼は不思議な顔をしていた。焦っているのか、怒っているのか、悲しんでいるのか……。それはどうしてなのか、何が起こっているのか気になつて仕方なかつた。彼女も同じよつた悲痛な顔をする。

「……おい、ショータ！」

走りながら、彼女の様子に気がついたメツスイーが叱責する。即座にショータは顔色を直す。

「今やることを考えろ！」

「…………ん

ショータはたつたそれだけ答えた。考えることが沢山あつたけれど、メツスイーが言う通りだ。

(また会えるんだよね、アトル…)

心の中でもう一度背中を振り向き、そして走り出す。

大丈夫、大丈夫。

前向きに、前向きに。

前向きに、前向きに……。

アトルと別れてから、三日が経つた。あれから連絡はない。

帝国は彗星事件で騒然としていた。メツスイーについて市場まで行つても、人気がないし、街全体に活気がなくて、妙にざわざわとしていた。以前は商品の値切り交渉の煩い声が聞こえたり、昼間から酒に酔つた若者たちの喧しい怒鳴り声が聞こえたりしていた。それが……こんな葬式みたいに静かになってしまふなんて……。

ショーダはこの頃、メツスイーの家に住みついていた。本当はそろそろ天界に帰る頃なのだが、実際帰つても仕事がある訳ではないので、無断で滞在期間の延ばしていたのだ。

そして、昼の間メツスイーが出かけている時に、彼女は国の情報を集めをしていた。メツスイーが言うには、今は情報をいち早く集めることが重要なのだそうだ。その理由は教えてくれなかつたが……。

夕方 。 紅い夕陽が木々に光を投げかけ、やがて空の紺碧が現れ始める頃。

ショーダは、窓際に寄りかかつて、長い溜息をついていた。

彼女は、今日もテノチティランに情報を集めに行つた。でも人数が少ない上、彗星事件に関する眞面な情報は得られなかつた。やっぱり王城に忍び込んで情報を得てくるメツスイーを待つしかない。今日の活動が終わり、外を眺めながらぼーっとしていると、黒衣に身を包んだメツスイーが帰ってきた。ショーダははつとして立ち上がり、すぐに駆け寄る。

急いで扉を開けると、その前に彼が力の抜けた目で立ち竦んでいた。その表情は険しく、沈んでいる。

何かあつたのかと聞こつと思つたショーダだが、嫌な予感が胸を過つて、一瞬躊躇つた。

「あ……お帰りメツスイー。その……」

ショーダはさり気なく訊こつとしたが、どうしてもぎこちなくな

つてしまつて、声に出すことが出来なくなつた。

そうやつてもじもじしていると、見かねたメツスイーの方から、話を切り出した。

「シェータ……まづ、落ち着いて聞いて欲しい。出来るな？」

「……うん」

心を決めて、シェータはしつかりと頷く。

メツスイーは眉間に皺を寄せ、苦しげな表情で彼女にそのことを告げた。

「アトルが……生贊にされたことになつた」

「！」

冷たい血液が、脳天から、一瞬にして体を巡つた。
頭が真っ白になつた。何もかも空っぽになつて、ただ目を開いたまま動けなかつた。

嫌だ。認めたくない。……でも、

これは事実だ。

ドタッ、という音を立てて、シェータはその場に力なく崩れ落ちた。そして顔を手で覆い、唸り声を立てる。泣くことを、叫ぶことを必死で堪えて、うんうん言いながら肩を震わせて堪える。

「……」

メツスイーはそれを悲しげな瞳で見つめた。

「……大丈夫。続きを……話して」

俯いたまま、彼女はよろよろと立ち上がる。そして、メツスイーの方を見上げる。

肩が、拳が、足が……全身が、震えていた。視界もぼやける。瞼
まぶた
が重い、熱い。でも、立ち止まってはいけない。

今の状況を知つて。考えて、考えて……。

メツスイーは続けた。

「この間の彗星……あれはウイツィロポチトリが弱つているからだということになつたらしい。それで、神に捧げる高貴な生贊が必要になつたそうだ。それで、第2皇子であるアトルが……」

「…………」

ショータは泣かずに、じつと黙つて彼の話を聞いていた。震える体を抱きしめて、一所懸命抑えながら。薄桃の唇が、真っ赤になるまで噛みながら。

メツスイーは、そんな彼女を見ていられないと言つように、彼女から目を逸らした。黒髪が額に垂れ、表情に黒い影を落とす。

彼だつて辛いのだ。こんなことを彼女に伝えることが。でも、言わなくてはいけなくて……それが本当に苦しくて……。

だからと言つて、何もしない訳にはいかない。

「…………ショータ」

彼は再び顔をショータの方に向け、乱暴な仕草で口の黒髪を払うと、意志を持つたしつかりとした口調で言つた。

「生贊にされるものは、期日までは神のように扱われるそうだ。だからアトルはきっとぴんぴんしてゐる。……その内に、俺らでいつを取り戻そう」

ショータは驚きで目を見開いた。

そんなことが出来るの？

彼女はそう思つたが、口には出さなかつた。問題は出来るかどうかじゃない。するかしないか、そう思つたからだ。

「……分かったわ。絶対に、アトルを殺せたりはしない」

握り拳を一層強く握つて、強くそう誓つたが、不意に瞳からぼろりと涙が零れた。

「…………あ…………」

涙を拭おうと手で押されたのだが、次から次へと止まることがなく零が零れていつた。ぼろぼろ零れる涙を、ショータは必死で止めようとするのだが、もう自由が利かなかつた。

だんだん顔が歪んでくる少女を、メツスイーは黙つて抱き締めた。そして落ち着いた、優しい声で言つた。

「…………辛いのを抑えるな、ショータ。あいつを助けに行くのに、涙を持つていく必要はない。…………今は、堪えなくてもいいんだ……」

…「

シーラは、がつしりとしたメツスイーの胸にしがみついた。

「うう……ひつ……ひつ……」

まるで子供のように、シーラは痙攣しながら泣きじゃくった。

我慢することなく、全てを吐き出して、声にならない叫びを上げた。

アトル、会いたいよ。寂しいよ。

居なくなっちゃうのなんて嫌だよ。

置いて行かないでよ。

大丈夫。僕は君の傍にいるよ。

そう言つてもらいたい相手は、今ここには居ないのだ。

だから、あたしが助けるんだ。

「ああ！」

情けなけれど、耳鳴りのするほど叫びを上げて、全てを解放して泣いた。

そして、決心した。

絶対に、何があつても、彼を助けると。

第4章 神への生贋（後書き）

今回、忙しさのあまり手抜き気味です……。
ああああ……「めんなさい……」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0521y/>

緑風のシェータ

2011年11月21日06時48分発行